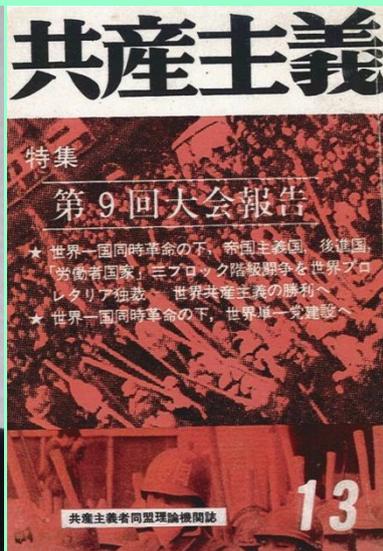


# ★柳田健さんを偲ぶ会報告集

謝辞！協力 KK（梅田解放区）



司会—★芹生琢也  
(60年大阪市大商学部入学  
第二次フント)

私は本日の司会を担当します、  
芹生琢也と申します。  
柳田健(たけし)さんは、6月13日  
にお亡くなりになりました。謹  
んで、ご冥福をお祈りいたしま  
す。  
最初に全員で黙祷を捧げたい  
と思います。黙祷！

2019年9月22日



★武田信照（57年大阪市大経済学部入学  
第一次フント 元愛知大学学長）

武田でございます。多分、今日の参加者の中では彼とは一番長い付き合いであったと思います。

最初に柳田君との付き合いが始まったのは、年表で見れば1959年の秋の事でした。

だから丁度60年のお付き合いとなります。

そのきっかけは、彼は大阪市大経済学部の中心的活动家でありました。私は全く縁が無かった、その経済学部自治会に秋から加わる事になりました。

それまで私は59年5月まで「大阪市大新聞」の編集長をやっていました。そう言う関係で、当時の左翼運動と学生運動の状況については、ある程度承知していました。例えば、社会主義協会の岡崎三郎さんとか、日本

共産党の上田耕一郎さんとか、新左翼系で言えば黒田寛一さんとか、又市井の哲学者の藤本進治さんとかです。このような方々に原稿をお願いして、「現代革命の問題点」とか言う特集記事を載せた事もございました。

さて、編集長を辞めてどう言う学生生活を送ろうかと思っております、当時の学生運動の流れから、その一翼に加わりたくと希望いたしました。



私は自治委員でも無かったですが、秋の10月頃経済学部自治会室に行き、お手伝いをしたいと言う事で、ビラ配り、タテ看板作り、あるいはクラス討論と、そう言う活動に加えて頂きました。

当時の学生運動は、前年のブントの結成を受けて主流派としてあり、他方日本共産党系もあり、又革共同関西派と言うのが、かなりの勢力でありました。こう言う流れの中で、経済学部自治会はどう言う選択するのかが、大きな問題でした。

当時の大阪市大は、商学部は自治会運動が無かったですが、他の学部は大體日本共産党系の構造改革派が抑えていました。

経済学部だけが中立的な立場であったと言う状況でした。

しかし、これだけでは済みませんので、これをどうするか、柳田君を中心に相談しました。

当時の学生運動の流れ、又文献からして全学連主流派に対する共感が強かったのですが、大きな選択の問題でありますから、念を入れて柳田君が京都大学の佐野茂樹さん、私が大阪外大の清水健夫さん等といろいろ話を致しまして、その結果全学連の主流派の線で行こうと清島、原両名を説得しました。

そう言う折も折、59年11月10日頃でありましたが、経済学部自治会室に行きますと、突然唐牛全学連委員長がいるのです。これは関西の各大学へのオルグに来た流れでやってきたのです。

私の下宿に、二週間ほど一緒に過ごしまして、下宿からあちこちに出かけていました。

中心は、大阪市大に拠点を作るということで、大阪市大の活動に助力する事が中心でした。

それで、さきほど述べた事情もあって、ブントを創ろうとなりました。わずか、さきほどの四名ですが、ブント大阪市大支部を結成し、教養部の食堂に結成宣言を張り出しました。

そうすれば、文学部の矢谷恵慈(えいじ)君も加わりたいと、結局五名で結成しました。これが、ブント結成時の状況です。

その間、唐牛が大阪には全学連中央執行委員が一人も居ないと、だから一人を出せという話があって、私は柳田君を一生懸命説得したのですが、彼はガンとして受け付けなくて、私が板挟みになった状況で、最後は私が引き受ける事になりました。しかし、当然学生運動の経験がほとんど無い私が中央執行委員を引き受けるので、60年2月に全学連中央執行委員会があった時、大阪府学連の中執から、「武田中執は認められない」という動議が出されました。当然主流派が多数派ですから否決はされました。

それから60年になりまして、数多くの後に活動家になり経済学部自治会のみで無く、全学の大阪市大の学生運動の中軸になる方々が入学してきました。大阪市大学生運動は大きく様変わりをしたという事でした。

もう一つ話させて頂く事は、1963年事です。この時は柳田君は片桐悦子さんと結婚されていました。私も刺激された訳では無いですが、高校の同期の女性と結婚しようとなって、その女性が「山好き」なので、登山に誘ってくれました。九州の九重山では音楽鑑賞団体の九州規模のジャンボリーが山麓で開催されるとの事でした。女性の紹介も兼ねて、柳田夫妻を誘いました。柳田夫妻も了解してくれて4人で行きました。



当時、福岡県の大正炭鉱で谷川雁、森崎和江夫妻のリーダーの大正炭鉱行動隊が活動されていました。九重山を降りて後、四人でアポ無しで尋ねました。非常に気持ち良く受け入れてくれまして、行動隊の状況について色々話をしてくれました。それだけでは無く、大正炭鉱の鉱口まで連れて行って頂き、行動隊の面々とも引き合わせて頂き、色々とお話を伺う事も出来ました。その後、佐賀県の伊万里の実家に泊まって頂き、さらに長崎県に足を伸ばしまして長船社会主義研究会(社研)の面々とお会いして、社研の活動についてお話を伺いました。こういう事が1963年にありました。

皆さんあまり御存知の無い話だと思いますので、追悼の意を込めて話させて頂きました。60年の付き合いでしたので、彼が亡くなった事はポツ

カリ穴が空いた状況です。



**新開純也（八木沢二郎 59年京大入学 共産同全国委）**

新開でございます。柳田さんは唯一の兄貴分でございます。歳上の方々も多く居られますが、僕はベタベタした関係の付き合いは好みでは無いのですが、柳田さんはその中で、ある意味唯一の例外で兄貴分として付き合いをさせて頂きました。

武田さんの話にありましたようにもう60年安保から来年60年、ブント結成からは60年を過ぎました。

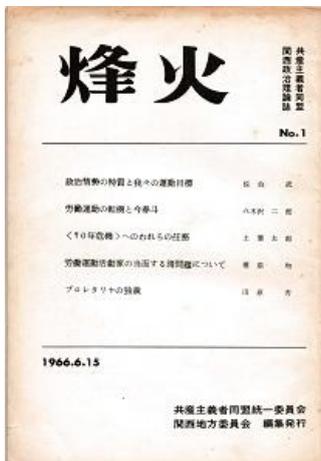
ブントの創設者は、大阪市大であれば武田、柳田さんであり、同志社大学では佐藤、仲尾さんというメンバーでありました。京都大学であれば、北小路敏、小川登、佐野茂樹さんというメンバーになります。

彼らは59年にブント関西地方委員会を作って、我々59年、60年に入学したメンバーが60年安保闘争を闘い、

その後、関西ブントの中心メンバーになるという事でありました。

その後は、大阪市大で言うと田宮高磨君であり、いわゆる赤軍派世代になります。

ブントはこのような流れにありました。僕は丁度、創設者と赤軍派世代のまん中居ましたし、最後は今日参加されています渥美文夫、榎原均さん等は労働運動と言う事で出ました。僕は、最後まで学生運動に関わり、赤軍派世代と付き合いされたという状況でした。



丁度、上と下の世代の運動上では結節点みたいな位置にいまして、それぞれ兄貴分、弟分という付き合いがあります。

先ほど言いましたように、柳田さんは僕の兄貴分でありました。

特に知り合いましたのは、当時大阪福島にありました「関西戦旗社」がありました。そこで、学生運動だけでなく労働運動を介し、やがて反戦青年委員会を通じて、70年安保闘争に向かいました。その時に、柳田さんと付き合いが始まりました。確か66年、67年でありました。一時期は、片桐さんと結婚されて住まわれていた芦屋の「ブント・マンション」に、僕は半年ぐらい居候していました。

その時に様々な議論もして、濃密な関係でございました。

そういう意味では、柳田さんには公私ともにお世話になったわけです。

そして、運動の後の70年代も様々な付き合いがありました。僕が2000年代に運動に復帰してから、京都の反戦共同行動とかKCMを始めました時に、柳田さんは非常に喜んでくれて、協力して頂きました。

例えば、僕はパソコンは全然出来なかったのですが、柳田さんがパソコンを送ってくれて、「お前、これからの時代はパソコンをやらないとダメだ！」と言われ強制的に教えてくれた事もありますし、又活動資金の借用を依頼するとあまり少なく無い金額を頂きました。その後、返済に行くと半額で良いからとも言われました。こういう事も含めて協力して頂きました。

特に晩年は、ここに参加されています、足立、山中さんと連絡を取りながら、旧赤軍派系の「よど

号グループ」「日本赤軍」関係の救援、支援を精力的に行われました。

柳田さんについて、今でも鮮明に覚えていて柳田さんらしいなと思う事を一つだけ言いますと、69年。70年頃でした、京都で会合があってその後、柳田さんと一緒に高瀬泰司の白樺へ飲みに行きました。その時は、全共闘運動が真っ盛りの時代でしたから、学者が居り、ビートのきいたロックが流れ、ダンスが行われ、非常に喧騒で賑やかな状態でした。その時に柳田さんがどう言ったかという「新開、これは階級崩壊だな」と言いました。これは今でも覚えています。柳田さんらしいオールド・ポルシェヴィキの言葉だと印象に残っています。

長い間、お世話になりました。ご冥福を祈ります。



代読 金子恵美子（赤木志郎夫人）  
メッセージ（よど号グループ・赤木志郎  
65年大阪市大入学）代読



山中幸男（68年東京都立大学入学 救援連絡センター事務局長）

私は、東京で救援連絡センター創立以来 50 年関わって来ました。柳田さんのお歳を考えるとかなり後輩になり、1968年4月に東京都立大学に入学して、諸闘争の中で逮捕者の救援活動をして来ました。

都立大学全共闘を結成するのですが、当時都立大学は共産党の強い大学であったので、「都立大学全共闘救援対策部長」という事で、一回生の時から救援暮らしました。

その中で知り合ったのが、救援連絡センター創立メンバーの水戸巖さんや、都立大学の高木仁三郎さんがおられました。一気に時代は経ちますが、水戸、高木さんも鬼籍に入りましたが、反原発運動の世界では、

「神と言いませんが」歴史的な人物でした。

柳田さんとは、「よど号」グループの救援関係で、大阪に伺い様々な話をしました。大阪市大の関係者ともお会いしました。僕は、革共同中核派、共産同、社青同解放派等々を纏めるのがいやだったし、僕は、元々生粋に全共闘中での学生運動で育って来ました。しかし、現在も救援連絡セン

ターに従事しています。

柳田さんの思い出は「時効論」です。城崎勉さんがアメリカで服役後、強制送還され再逮捕されました。柳田さんは「山中君、時効を主張しなければいけない」と言われました。

弁護士の世界では、「外国にいる期間の時効中断論」の撤廃を運動として主張しても、ムダだと意見が大勢でした。柳田さんは、これには憤慨していました。柳田さんの印象は、年寄より云々を理由にはいけないのですが、言い出すと、しかし現実論、運動論として周りの者は動かないよ…と、私なりに一生懸命説得したのですが、結局ムリでした。

それから朝鮮の話では、金正男暗殺事件の時、金正恩政権に対する批判的なメールを送ってきました。柳田さんは信念の人ですから、金正男暗殺についての憤慨が判りますが、金正恩政権が実行したという断定の根拠も無いのだから、「北朝鮮がやった」云々では、ネット右翼が跋扈する中で、得策では無いと説得を試みましたが、これも上手く行きませんでした。

以上のような思い出がありました。

ただ困難な中であって、「よど号」事件の救援とか、救援センターの歴史でも、被逮捕者に弁護士を付ける以上の事は出来ていないのです。

現在東京では、ほとんど逮捕者が出ていません。むしろ、大阪の方が関西生コン労組弾圧で多数の逮捕者を出しています。この間、救援連絡センターの逮捕者は年間20～30名でした。

約3カ年分を関西生コン労組単独で、生み出している歪んだ状況です。

それから何と言っても、沖縄の辺野古新基地前の抗議行動の逮捕者も出ています。

私は柳田さんと「よど号」救援関係で知り合って、日本赤軍関係の逮捕者が出る度に、どうしても関西の方が多く、関西に来て柳田さんと会う機会が増えました。

「よど号」、日本赤軍の帰国者の半分以上は大阪にいます。

そういう人のバックアップをしてくれた人の一人が柳田さんでした。そうするとこれは、政治方針と言うよりも、義理、人情、人間関係の意味と言えます。

どちらかと言うと、政治党派の問題に戻りますと、赤ヘル系の人たちは人情に熱いとしみじみ思います。赤ヘル系は最高ですと、ノンセクトを代表しませんが、救援連絡センター事務局長として余計な事ですが言えると思います。こんな思いをさせて頂いたのが柳田さんでした。

最後に言えば、重信房子さんは、懲役20年の有期ですので2022年5月28日には満期で出所する予定です。それで10月28日から「パレスチナ・沖縄・福島一国際連帯フェスティバル」を東京、大阪、福岡、沖縄、福島で行います。ぜひ参加をお願い致します。

柳田さんの冥福を祈ります。



★仲尾 宏（園田 浩 56年同志社大入学 第一次ブント）

柳田さんの年譜を見ると、彼は一つ下ですね。どちらにしても80歳を超えていますから、御迎えが来て良いような年齢でございます。柳田さんを知ったのは60年安保闘争前後でした。

その時、京大が先駆的にブントに加盟して、その後島さんのオルグを受けて同志社大学が加盟する事になりました。約80名の日本共産党細胞員が、ほぼ全員共産党を脱党して、その内8割ぐらいがブントに加盟するという事になりました。

しかし、60年安保闘争以降、どう運動を再建するかとただダラダラと時間が経過した事を覚えています。その頃、大阪市大がブントに加盟するとなり、初めて柳田、武田さんと知り合いました。

60年安保闘争後、東京ではブントは戦旗派、プロ通派、革命の通達派等に分裂して、それにどう関わりかの話が出ました。とにかくそれは辞めて置こうと言う間に、大部分が革共同全国委員会に行きました。とにかく纏まらなかった。



それで、政党、政派をいきなり作るのでは無く、まず労働者へのオルグから開始して再建する事になり、「労働者協会」というものを作りました。そして機関誌『烽火』を作ったのです。

「烽火」と言う誌名は、私の命名ですが、その後セクトの名前になってしまいました。

京都では、京大と同志社大学、大阪では大阪市大が当時の運動の中軸になったと思います。

そして、「労働者協会」は何をするかとなり、名称のとおり労働者をオルグしなければならないとなって、京都と大阪に「労働者学園」を作りました。特に京都は拠点が無かったので、大阪に行って労働者をオルグする事になりました。労働者学園の講師に、京大では阪上、

竹本さんが、同志社大からは私等が行きました。参加した労働者が母体になってやがて反戦青年委員会の魁になりました。その中で、柳田さんは積極的、原則的な意見を出す人との印象があります。その後、新たに関西ブントという組織を作って行くことになったのですが、柳田さんは、とても原則的で、しかも勇ましくて説得力のある活動を続けて居られたという記憶があります。その後、紆余曲折がありましたが、赤軍派が出来る中で私は運動から身を引いてしまいましたので、その後柳田さんがどのような軌跡をたどられたかは記憶にはありません。

今から12年前に、京都で反戦・反貧困・反差別共同行動という運動体を作って、そして今の時代に相応しく、しかも原則的な大衆運動を呼び掛けた中に、再び柳田さんの姿を見受けられました。

若い時と変わらない原則的な態度と叱咤激励をして頂いた事を覚えています。

お身体が悪いとは聞いていましたが、こんなに早く永久の別れになるとは思っていませんでした。

彼の原則的な生き方は、とても印象的だったという事を改めて申し上げたいと思います。



★田川晴信(61年  
同志社大入学 第  
二次フロント)  
メッセージ(重信  
房子)代読



★柳田一郎(柳田 健子息)

皆さん、本日は父の為に集まり頂きありがとうございます。

一つだけ父のエピソードをご紹介します。父は最後に大腸ガンを患い、その手術の時脳梗塞を発症しまして、それで手術も何も出来ない状態で入院していました。

ところが、元気もかなり残っているので、早く家に帰りたくて家族も非常に困る事をずっと言っていました。

亡くなる二日前に連絡がありまして、いよいよだと病院に参りますと、声も出ない状態なのですが一生懸命何か言いますので顔を近づけ聞き取ると、「この柵を外せ」、家に連れて帰れと、結局、囚われており、自由に生きたいと、そう言うところで皆さんの印象に残るような

活動をいろいろとやってきたのかと思いました。

父らしいエピソードだと思いました。本日は、皆さんありがとうございました。

《第2部》 \* \* \* \* \*



★浅田隆治（三谷 進 57 年京大入学 共産同 RG）

今年の春、柳田さんと同じ病院に入院して、彼とどっちが先に逝くのかと話合いました。

彼は五つぐらい病気を抱え、僕は一つでした。この差です。僕が退院してここに参加しているという事です。彼とは難しい話もいろいろしましたが、彼の一番の問題は「人間」なのですね。

彼は人間をすごく好きであった。長い長い、付き合いでした。

皆さんの話に出て来なかったですが、彼は歴記とした中小企業の専務さんでした。専務としてきちんとした経営もされました。資金と営業担当の専務ですが、中小企業ですの社員と同じ事もしなければならぬ。屋根裏に上って電気の絶縁の仕事をする、私は「屋根裏の専務」と

呼んでいました。

もう一つ言わせてもらえれば、年譜の中で何年間も不詳と記されています。この間、僕はずっと一緒だったのですが、これは墓の中まで持って行けという話かと思い、話しをしないのですが、一つだけ話したいと思います。あの頃会議をした際、大抵彼は寝るのです。「あんたは会議になったら寝るな」と言ったのです。しかし、実は寝るという事で、一つの政治的立場を表していたのかも知れません。いろいろあっても、人間的に最後まで付き合おうと言うのが彼の信条だったと思います。そういう意味では、かれは「人間主義」であって、人間を本当に大事にした人だと思います。

人間の中にある靈魂は不滅であるとして、献杯したと思います。



★渥美文夫（佐々木和雄 59 年京大入学

第二次フント書記長）

（注）3・4 塩見孝也お別れ会写真

ご紹介頂いた渥美です。

柳田さんとの付き合いは、1960 年頃から非常に長いものでした。その間実にいろんな事があったのですが、私は自分の心の整理がついて居ないので、あまり政治的な柳田さんとの出会いについては発言したく無いという気持ちが強いです。

柳田さんと最後にお会いしたのは、去年の10月に柳田さんが病気で倒れられ入院された時、私はお見舞いに伺ったのですが、元気ではありましたがやはり病状は進行しているようでした。

私は柳田さんにブハーリンについての話をしたのですが、結局何も語らずにお別れしました。近年、ブハーリンに対する評価が高くなっている感じがしますが、私はそれは解せないと思います。ブハーリンというのは、トロツキーとかジノビエフとの党内闘争でも、いつもスターリンとグループを組んでいました。一党独裁の問題でもスターリンと変わらない考えです。ただ、工業化のテンポに関しては、確かにスターリンとの違いはあったのですが、大筋はそんなに変わらないものです。少なくとも、スターリンかブハーリンかの選択は、私はあり得ないと思っています。



スターリンというのは、私は確かに60年安保闘争以来、スターリン主義の国際共産主義運動に対する害毒を厳しく批判して来まして、今でも私はその指摘は正当であると思っています。

私たちにとって欠けていたのは、ソ連の労働者、人民、農民にとってスターリン主義とは、どういうもので在ったのか？という点です。この点が少し明らかで無かったように思います。

私は簡単に申しまして、スターリン主義は結局開発独裁でしか無かったと思います。

その開発独裁は、中国も同様ですが現在見られるように資本主義への道を行って行く。

では、ロシア革命 100 年、中国革命 70 年の歴史は、結局は資本主義への長く険しい道でしか無かったのでは無いか？これはどういう事なのか、どこで我々との分岐点があったのか？これらの点について、最近いろいろと考えています。

この間、香港で 100 日にわたってデモが続いて、100 万人の大集会が行われています。

20 世紀の場合は、このような歴史的な大闘争の中にはかならず共産主義運動が包摂されていたのですが、現状は、そうとも言えない。私はそう考えています。

かって、ベルンシュタインが「社会主義の最終目標は無であり、運動がすべてである」と言ったことに対して、レーニンが痛烈に批判しました。しかし、よく考えたらどうなのか？そういう中で共産主義の復権を果たすためには、そして共産主義の復権を柳田さんに報告するには、私はまだかなりの時間が必要だと思っています。以上でございます。



★境 毅 (榎原 均 59 年京大入学 共産同 RG)

旧姓竹内でございます。大阪市大は、自治会選挙の応援で最初は戸田川さんが行ったのですが、その後、お前が行けと言われ、その時柳田さんとか、田宮高麿、森恒夫と知り合ったという経過があります。今、渥美が…同期ですので、渥美と言いますが、中国の事を言いましたので、少し反論して置きます。中国は、資本主義に違いないんですが、その資本主義がアメリカを追い越して、世界的になるのか、否かの問題です。

僕はそれはムリだと思います。資本主義の不均等発展で言えば中国であり、次はインドですね。そして覇権大国になるんだと言う事になるのだが、多分それほど資

本主義の寿命は無いのではないかと僕は見えています。そうすると、中国は微妙な位置にある訳です。その事について、僕は政治運動 30 年やった後、社会運動 30 年やって来ましたので、この領域はあまりやって来なかったですが、何回か中国に行く機会があり、報告をしたりした結果があります。現在の中国を、どうやって本物の社会主義にするかという提案をいろいろ考えています。多分、あまり先は長く無いので、この研究についやしたいと思います。

もう一つは、僕は「7・6 事件」があった後、誰も居ないので突然東京に行けと言われました。それまでは、中電マッセントをやろうと、新里良光、大森昌也、関口〇〇さんも含めて頑張っていたのに、突然の東京行きとなりました。そのあたりの事は、今度本になります。『追想にあらず』です。私も書いていますし、ピョンヤンに行ったメンバーも書いています。出版後、大いに議論をしたいと思います。ぜひ、購入をお願い致します。



★橋本利昭（62 年京大入学 革共同再建協議会）

革命的共産主義者同盟再建協議会の橋本と申します。先ほど、山中さんが一番嫌いな党派として上げた革共同です。

しかも、それを再建しようというグループです。

柳田さんとは、面識がある程度だったのですが、彼の詳細な経歴を伺いまして、70 年安保闘争を共に闘った戦友であると共に、先輩であり、しかも私たちとは激しく争った関係であった事をあらためて理解しました。先ほど、彼の経歴の中で空白の期間があったと言われましたが、若干の時間的交差の中で、私も同じ様な事をしていました。非常のそういう点でも共鳴を感じます。

私たちが、なぜ、再建協議会と言ってるかと言うと、60 年代から 70 年代、そして 80 年代の闘いも清算するのでは

無く、その誤まりとか欠陥を徹底的に見据えて、乗り越えようという事で、例えば数 10 年かかるかも知れないが、やり遂げなければ、今直面している課題に対して共産主義を再建は出来ないと考えています。

そういう点で私たちの創設者であった、野島三郎、宗像〇〇さん達が、最近亡くなられましたが、何よりも星野文昭さん、・・渋谷暴動の戦士で獄中 40 数年で、謀殺されたという感じで獄中死しました。彼の闘いも、赤軍派の人たちの闘いと同様に、断固継承して検証する必要があると思います。そう言う点で、私たちの原点である 60 年安保、70 年安保闘争を正しく継承する事が必要と思います。今、日韓、沖縄で激しく排外主義が吹き荒れている中で、本当に共産主義を再建する闘いを、柳田さんに学んで、決意を新たに表明して置きたいと思います。



★前田裕悟（2019年6月28日死去 享年85歳 第2次ブント）前田夫人のメッセージ（代読 新開純也）

御存知のように、前田さんは柳田さんが亡くなった直後6月28日に亡くなりました。

前田さんの奥さんから今日の偲ぶ会に手紙が来ています。これを読み上げます。

「柳田さんを偲ぶ会が開催されるとの事で、何が何でも参加したいのですが、もっか歩行困難で外出出来ません。きちんと見送る事が出来ないのが本当に残念です。

夫の前田も入院中に、柳田さんの追悼会の相談をしなくてはとずっと気にしていました。

それなのに、後を追うように彼岸に行ってしまいました。

前田が柳田さんと活動した時間は長く、プライベートな部分も共同住宅を建て、保育園を始めるなど、良く息の合ったコンビだったと思います。前田が生きていれば、

多くのエピソードが語られる事でしょう。

私自身も学生時代に、ブントで柳田さんとご一緒した事がありました。決断力のある方だと、感心したことを覚えています。再度、柳田さんの追悼会に参加出来ないことお詫びすると共に、前田の追悼会開催も予定されているとの事でありありがとうございます」。

★芹生琢也（60年大阪市大商学部入学 第二次ブント）

前田さんについては、3年ほど前に柳田さんから病気が進行して先も短いので、生きている間に温泉に行きたいとメールがありました。前田さんが有馬温泉を予約して、前田、柳田さんの他に、武田信照、藤本（同志社大学）さん、私の三人が参加しました。

五人で語り明かした事がありました。





★佐藤秋雄（羽山太郎 61年専修大入学 共産同蜂起派）

東京から来ました佐藤秋雄と申します。

柳田さんには二つ世話になったので、その報告をします。

一つは、69年に、突然軍事委員長を引き受けて頂きました。我々は当時、心のボスとして軍事委員長の柳田さんに絶大な信頼を置き、武装闘争を貫徹する事が出来たという事が一つ。

二つ目は、1980年頃高橋道朗、芹生琢也、清田裕一郎さん等と「プロレタリア独裁研究会」と言うのを、5、6人でやっていました。その時僕も参加」させて頂きまして、柳田さんの一言で、中国に行くことになりました。当時、清田さんは「毛沢東思想学院」をされていたのですが、柳田さんの「清田、佐藤はどこも知らない山ザルだから、中国に連れて行け」の一言で、毛沢東思想学院の訪中

団の一員として中国訪問が出来ました。この二つは、柳田さんに非常にお世話になったことです。今日も、柳田さんの縁と言えます。みなさん、これからもよろしくお願いします。



★八木健彦（坂部 潤 61年京大入学 共産同赤軍派）

八木です。柳田さんについては68年の思い出を話したいと思います。

第7回大会が終わって、68年4月ぐらいから何故か、ブント関西地方委員会の三役が持ち回りとなりました。その時、柳田さんが議長をやって、私が副委員長をやれと、それが議長を引き受ける条件だと言われまして。副議長をしました。境君が書記長をしまして、68年暮れまで三人一緒にした記憶があります。だから、私は68年はあらゆる行動を柳田さんとやっていました。とくに会議が終わると柳田、境さんと私の三人が芦屋のマンションに行って泊まり込んで、翌日そこから活動に行くということを、ほぼ毎日していました。柳田さんが最も輝いていたのが、68年10・21です。

望月（同志社大）が総指揮で、大阪部隊指揮が西浦（大阪市大）でありました。京都部隊が、電車で大阪に行き、大阪市大で合流して御堂筋デモになるのです。ゲバ棒はナガレの方から持ってきて淀屋橋でドッキングして大阪市大に搬入するという、芸術的な闘いであったのです。

総指揮望月、大阪部隊指揮西浦ですが、本当の裏の指揮は柳田さんです。

これらの技術的な事を仕切って出来るのは、柳田さんでした。

私はその時驚きました。柳田さんはこんな才能、能力があるんだとビックリしました。

それが後に、第9回大会で軍事委員長になったという前歴と思います。

もう一つ、68年暮れに軍事問題が出てきた時です。

ロシア革命の時、レーニンはチェカの委員長を「最もふさわしく無いような人物こそが、チェカの委員長にならなければならない」と言いました。ようするに、陰謀的で無く、人間味があつて誠実で冷静な人物が委員長にならなければならないと言いました。

だから、柳田さんが軍事委員長になったのは、これらの意味でなかったのだと思っていました。



68年が柳田さんが最も輝いていた時期は、堺反戦青年委員会をバックして関西地区反戦連絡会議を形成して、共産同関西地方委員会の議長になって行かれたという時期です。

もう一つは、「7・6」の件です。柳田さんがどう考えていたのか？お聞きしたかったですが出来ませんでした。ただ、「7・6」への赤軍派の動員オルグを同志社大学の堂山が関西戦旗社から電話等で行ったのですが、その時戦旗社には柳田さんも居られました。「かわいいものだね」という感じで柳田さんは居られました。結果として「7・6」が、後日のような事態になるとは、夢にも考えられずにいました。その事については、『追想にあらず』という本を出版しますので、様々な方々が書いていますので、ぜひ読んで頂いて、又議論出来ればと思います。柳田さんに、この本を見せられなかつた事が、非常に残念です。故柳田さんには贈呈したいと思います。

ひ読んで頂いて、又議論出来ればと思います。柳田さんに、この本を見せられなかつた事が、非常に残念です。故柳田さんには贈呈したいと思います。



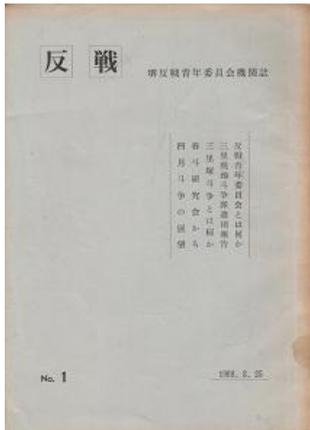
★高幣真公（62年京大入学 堺反戦青年委員会）

高幣です。先輩方がたくさん居られる中ですが、私ももう75歳になりました。

先輩方を差し置いて発言を許されたのは、堺反戦（堺反戦青年委員会）を柳田さんと一緒にやっていたという事だと思います。67年私は大学を卒業して、実家が堺で親が不動産屋をしていました。

私は、その不動産屋を手伝いながら、ブント活動を始めました。堺反戦の会議は、私の不動産屋の事務所で行っていました。そしてわずか1年で、堺反戦は拡大し、堺だけでなく大阪の各地に地区反戦が出来、ブント系反戦が一番多かったです。

私も堺反戦を一年で卒業して、二年目はブント関西地方委員会の役員（財政部長）をやり、で柳田さんは議長です。ですから、関西ブントの最も華やかな時期、関西地区反戦連絡会議の時期です。そういう時期を柳田さんと一緒に活動した事は、楽しい思い出です。



当時、関西の指導的活動家は、どんどんと東京に送りました。私も、69年の春に東京に行きました。その年の7月に「7・6事件」が起こる訳です。要するに赤軍派が結成される。

赤軍派が結成される事は、要するに関西ブントの分裂なのです。私は、頭が真っ白になり何をやって良いのか、1か月ぐらい何も考える事が出来なかつたです。

当時の書記長が渥美さんです。責任は渥美さんにあるのか？あるいは関西に残っている指導部—柳田、新開さんにあるのか？そういう事を考えましたが、しかしそんな事考えていても、前に進まないの、69年秋は

何をやったかと言うと、赤軍派は首相官邸占拠を大菩薩峠で軍事訓練をしてやろうとしたのですが、失敗した。残ったブントは、同じ様な事をやっていた。同じと言っても、火炎瓶とゲバ棒で街頭で闘いました。見事に第8機動隊に粉碎されました。私、芹生さんも一緒に逮捕されました。一年ぐらい拘置所に入りました。その間にブントは四分五裂です。

要するに第二次ブントが崩壊したのです。という事は赤軍派も失敗したが、ブントも失敗したのです。私は、こう思っています。私は、総括して、エンゲルスが蜂起について書いています。

当時のブントは、前段階武装蜂起も含めて戦略、戦術主義でした。その背景は「過渡期世界論」でした。要する、ロシア革命、中国革命によって階級闘争は高次の段階に達しているの、先端が蜂起すれば民衆が起ち上がるだ、簡単に言えばこういう理論だったと思います。

70年代に、私はこういうのは間違いだと思いました。何故、ブントは失敗し間違った原因は、学生運動に根拠を置いているからだと思、労働運動こそ共産主義の基本的な立場であり、依拠する階級であると思、70年代は労働運動をやろうと思、

クジュウコウイチさんが、神奈川県で労働運動をやっていました。私もそこに行き、芹生、浦野さんと一緒に「労働学校」を創りました。その後、セクト主義では無く「統一戦線」を志向した樋口篤三という共労党出身の人が居て、その人が「労働情報」紙を創ろうと呼びかけ、私は参加して専従として16年居りました。その間に、清田裕一郎さんが中心になって「プロレタリア独裁研究会」を作りました。これには、柳田、芹生、浦野、高橋さんが参加されました。10年ぐらい行っていました、結論は出なかつたと思います。

私は、99年に「若宮正則物語」を出版しました。彼は赤軍派の釜ヶ崎で活動した活動家です。

彼は、私とほとんど歳が変わらなく、宇和島の水産高校卒業の労働者です。神奈川でブント系が組織したデモに遭遇して、ブントに加盟し、大菩薩峠で逮捕されます。

逮捕後、彼は釜ヶ崎に行き労働運動をします。彼は、1979年4月、増淵利行ら18人が土田・日石・ピース缶爆弾事件で起訴されて公判中に、1969年10月24日の警視庁機動隊庁舎爆破未遂事件の実行犯は自分であると証言した。83年3月に上告を取り下げ、京都刑務所に下獄しました。何故、この物語を書いたのかは、塩見から聞きまして私はブントは何だったか悩んでいましたが、暴力革命云々では無く、こういう良い話もあると思、少し話がそれましたが、この本を書くのに柳田さんも協力してくれましたし、柳田さんの精神は、先ほど浅田さんが「人間主義」と言われましたが、その通りだと思います。本当に人間見溢れる、革命的情熱を持った人だったと思、



★上原敦男（65年明大2部入学 共産同赤軍派）

今は香川県におります上原と申します。出身は明治大学です。

重信さんと同期で、一緒に「現代思想研究会」というのを作りました。現代思想研究会は、明治大学の中で党派に属さなかったですが、学生が集まって来るといふ不思議な組織でした。重信さんが中心で、彼女の能力で沢山の人が参加して居ました。明治大学では、66年の「2・2 協定」があつて、社学同が完全に崩壊する訳です。その後、1部では米田隆介君が中心になって、2部は重信さんたちが中心になって社学同を再建しました。その社学同が、明治大学の後の学生運動の一翼を担った訳です。私は途中で、東京大学の安田講堂に、当時で言うと「助っ人」で残りました。

そのまま逮捕され、それが69年の1月ですから、その

年の7月に「7・6事件」が起きる訳です。

「7・6」の前後に、何となくザワザワして獄中で不安でしたが、まさかあのような事態になるとは思わなくて、何とかなるだろうと思っていました。当時のブント戦旗社の人たちは、明治大学とも近く、交流もありまして、大変信頼していました。実は大変な事になっていたのです。今日、お見えになっている佐藤秋雄さんは専修大学で、明治大学とはまさに兄弟のように一緒に活動をしていました。もちろん、中央大学の社学同も明治大のすぐ近くですから一緒に活動していました。

あまりにも突然に関東のブントの人達分裂し、佐藤さん達が酷い目にあつたのですが、「全都合同会議」でリンチに合い、沢山の怪我人が出てしまい、そのままブントは崩壊して行きました。

残念ですが、中央大学と明治大学が駿河台通りを挟んで、対立するような構図が出来てしまいました。さらに残念なのは、重信達、現代思想研究会の一部のメンバーがこの動きに巻き込まれて、一緒に関西に逃亡するという事態になりました。

その後、僕たちは保釈されるのですが、時代は革命戦争に向かって走って行っていました。

その時、ハイジャック闘争の準備も始まっていました。僕はおっちょこちょいですので塩見からキューバに行かないかと話が出て、「良いですね」と言っている間に、行先が北朝鮮に変わって、誰も飛行機に乗った事が無かったので「上原、ちょっと飛行機に乗ってこい」となって、米子空港に調査に行き、千歳空港からボーイング 727 に乗って、機内を見て「これはやれる」となって、ハイジャックをやってしまいました。この件で又4年6か月逮捕勾留されました。ブントと縁があるようなないような、こんな経過です。佐藤さんには、社学同の時に明治大学でお世話になりましたが、恩を仇で返すような「7・6事件」になって、誠に申し訳ないです。

その後、香川県に帰ります。遠くの香川県から考えていて、やっぱり戦争—革命戦争という発想がそもそも間違いであり、その条件は無かつたという結論に達しています。それから武装蜂起は、党が行うのではなく、大衆が行うのだと思います。

僕はその結論に行きついた所で、今農業をやっています。一つだけエピソードを話します。

僕の畑は県道のすぐ傍にあって歩道があって、そこを色んな人が通ります。  
色んな人に、寄ってけと野菜を差し上げるのですが、最近は海外の実習生の方が沢山通ります。  
近くに弁当工場があって、朝2時ころから昼 12 時ころに終わる仕事に従事しています。  
カンボジアの若い女性労働者が自転車で通勤で通ります。  
時々、声をかけて野菜を差し上げている内に、お手伝いをさせてくれとなりました。  
最近では、草抜きをカンボジアの人たちが一生懸命やってくれます。という国際連帯をちゃんとやっています。  
柳田さんとは、京都の反戦共同行動集会で、毎年お会いしたり、西浦隆男と仲が良かったのですが、西浦が何か開催する時、かならず裏で柳田さんが糸を引いている構造が良く見えました。  
だから、柳田さんを西浦と共に尊敬していました。柳田さんがお身体を悪くされた後も、ボソボソと小さな声でいろんな話を聞かせて頂きました。でも、柳田さんも軍事をやり、テロもやっているのですね。怖ろしい人だったのですね。やっぱり、あの時代は、柳田さんも迷路に迷い込んで行く狂気というか、ブントの居たらなさ、未熟な時代だったと僕は思っています。しかし、闘いはまだまだ終わっていません、いつでも香川県から馳せ参じますので、声をかけて下さい。



★前之園紀男（○年早稲田大入学 共産同赤軍派）

この間、自分でもびっくりするような結論に至っています。

最近読んだ本の中にソ連の解体以前のイデオログであった、ヤコブレフの本（『マルクス主義の崩壊』アレクサンドル・ヤコブレフ 1994）があります。

ソ連では、スースロフと言うのが長年イデオロギー担当で支配して来たのですが、このスースロフの後継者です。70年代に一回後継者になったが、どうも思想が変だと言う事で、カナダの大使館に左遷されていた人です。その間にフルシチョフが始めた民主化の残党がソ連の指導層に入って、トップがゴルバチョフ、外務大臣がシュワルナゼ、イデオロギー担当がヤコブレフという三人組が出来て、下からの民主化運動をまとめあげる指導部が出来た。それでソ連は解体して、東欧諸国も全て解体す

るのですが、その一番のイデオログがヤコブレフです。

彼の著作を読んでいると、マルクス主義、レーニン主義がスターリン主義の根源だというのが結論なのです。非常に判りやすい。要は、資本主義を前提にして社会主義革命だとマルクス、レーニン主義者が革命を行い、一時代を築きました。

しかし、元々は、私有財産制、国家の誕生を前提にしているんですね。ソ連はドイツの捕虜を解放したんですが、彼らは歓迎されるのかと思ったら、どんどんシベリアに送られていくのを、ヤコブレフはこの目でみた。だからおかしいと思って研究したんですね。マルクスは、私有財産制度を前提として、資本主義の発展、それとその破壊、そして社会主義という、まあ、三段論法で、この理論を

組み立てた。

ところがヤコブレフが発見したのは、その論理学の基本ですけれども、前提を、私有財産制度というのが前提にプロレタリア革命を組み立てていくんですけれども、最終的にはその私有財産制度を廃止するという結論なんです。で、前提を否定してはならないということです。もともとその三段論法は成立しなくなる。そういう変な三段論法になっているんだということを指摘した訳です。

つまり、ソ連が、資本主義が社会主義になるんじゃなくて、ただの経済破壊にしかならない。これじゃうまくいくわけがない。それがやっぱりすべて、今の中核、革マル戦争だ。解放派の戦争も、連合赤軍問題も、すべて小さいのから、大きいのは第二次世界大戦のヒットラーの独ソ協定、カティンの森。全部その、大きくおかしなことばかり起こっている。

この社会主義で、で、こういうことの原因が、元々の、元祖マルクスの論理の中にあつた。これは気がついている人はかなりいるはずなんですけど、現世利益のために、中国の利益、北朝鮮の利益、いろいろあるでしょう。あるいは社会主義理論で食べている人たちも問題だ。今の日本にもいっぱいいる。その人たちの利益に関わることだと私は思うんです。それで、この声あまり起こらない。けどもやはり、マルクス・レーニン主義者であつた

私どもは、やっぱりマルクスが言った通り、科学だということ。共産主義理論は科学だということ。科学であれば、間違いは、悪しきは否定しなきゃならない。その勇気がない人は、おそらく他でも勇気がない人。そう私は思います。もし発言があれば、この事を言わざるを得ない。というのは、この間、柳田さんがですね、私に、君の結論を支持すると。私は非常にありがたいことだと思って。しかしこれは、そう簡単ではないと。皆さんこれについて考えていただきたい。そして世界が、とんでもない悲劇が生まれるひとつの要因。もう今さらファシズムはないと思いますが、スターリン主義はまだ中国にあり、そういうことがありますけれども、ここら辺を是非考えてもらいたいと。これを私たちの柳田さんへの追悼の挨拶にさせていただきます。ありがとうございました。



★藤本昌昭（旭凡太郎 60年大阪市大経済学部入学 62年度全学自治会委員長 共産同神奈川県委員会）

大阪市大関係ということでは、つい最近太田〇〇さんが死んだんでしょう？太田さんは1960年文学部入学なんですけど、文学部では当時、武曾佳久子さんと言う方と太田さんが入学されて、経済学部は盛況だったけど、文学部は本当に少数派だったんです、民学同の拠点だったんですよ。

そこで、むそうさんと太田さんが入学して、あんまりそれを継ぐ勢力はなかったんですけど、戸梶博夫君が62年に文学部入学して、かなり力つけたんですけど、それはやっぱり、むそうさん、太田さんとの関わりがちよっとあつたと思うんだよね。で、その人が死んじゃつたのに、まあ、追悼しないのは残念なんですけど、でもそれだけちゃんと共同で追悼したということで、一応報告

しときます。

柳田さんについては、ここに書いてあるけど、「大阪市大ブントは私が育てた。これを率いて、京大、同志社のブントと関西ブントを形成し、60年度ブント敗北後の東京運動とともにブント再形成の運動を闘った」って書いてある。

柳田さんは、そういう意味では、大阪市大のブントを作ったという責任感があったと思う。何かそういうことから言うと、あの当時の学生運動というのは本当に厳しかったんだよね。で、特に大阪市大で、ここに来ている人いっぱい居るんだけど。あの時代、60年代の学生運動が楽しかったとか言う奴はいないと思うんだよな。本当に厳しかっただろうと思う。私もその組織を出てます。卒業してたから、付き合ってくれてたと言うのが彼なんだよね。LGの会なんかにも俺参加してたし。やっぱり彼なりに責任感があったんだろうなと、そういう感じがあった訳ですよ。

あの時代は、一つは、党派闘争の相手だった民学同というのがあったんだけど、これ共産党系なんだけど、結構大衆運動強気に頑張るんだよな。で、オルグ合戦も結構頑張るんだよ。

一応私が60年までは少数派だったと思うけど、62年に全学で力つけて、一回主流派になるんだよね。ところがその後、党派闘争でかなりやられて、頑張ったんだけど。大学管理法案反対闘争では、62年にさっき言った西浦君とか戸梶君とか田宮君とか新しい一年生が出て来て、それで全学自治会選挙で勝ったんだけど、62年以降、かなりやられてね、65年には自治会とられちゃったんだよね。もう一つの問題は、あの頃、大阪市大だけではなかったと思うけど、全国党の問題があったと思う。

全国党を作る展望というのは、全国党、党派闘争の問題もあると思うけど、党派闘争やる方針というのは、手段でもなかったという感じ。いわゆる政治権力を闘争を通して階層形成するというの、それ自身は間違っていなかったと思う。やっぱり党内闘争として無理があったと思う。

共産主義を基本にした資本主義批判を軸に出来た。そういう事が、あと何年か後には健全化するんですけど、そういう意味では、資本による他人労働支配を気にした。その構造も含めてね。他方、破壊し、内ゲバにしていく、党派闘争の主題点がやっぱりあの頃なかったという、問題があって、みんな疲れてしまった。全国党の展望が作り出せなくてね。



大阪市大の活動家というのは、多分消耗したと僕は思ってます。それが1967年の第7回大会で一応全国党ができたんだよね。一応私らも展望が出来て、全国組織がやることであった。

その後ただ田宮君たちは、そういう事は全然信用してなかったと思うから、第7回大会以降、田宮君たちは赤軍を作った。つまり党内闘争とか、党派闘争をどう作っていくか、そういうものが、なかったかも知れない。そういう意味で「7.6事件」を起こした。それ自体活動家の我々自身の責任としても、どっかで今でも責任負ってるなと、感じがあるんですけど。そういう問題がずっとあったという風に私は思っています。柳田さんは、その問題に必ずしも介入できなかったけど、そういう時代におけるブント

の学生に付き合おうとしたという意味では、そういう姿勢が常にあったんだろうなと。そういうのが柳田さんの思い出です。そういう意味で、その時代の柳田さんとは、敬意というか、連帯感を持っている。以上です。



★八木孝昌（60年大阪市大経済学部入学

63年度全学自治会委員長 社学同）

藤本と同期で60年大阪市大です。（同じクラスだよな！）最初は武田さんの話で、1959年のブントが大阪市大で、たった5人で作ったんだという話がありますが、そこで出来たブントがある広がりを見せるのが、1962年に、ブント系—社学同系が全学自治会の多数派に、図らずもなっていたのです。ここで一挙に活動の範囲が広がって、活動家が増えていったと。それを支えたのが、私を含めた60年入学組だったんです。ところがですね、その中で私は非常にいいかげんだったんですが、骨っぽい、藤本君とか、骨っぽい、とてもしっかりした庵谷寿男君とかいう活動家も、いたんですが、全体にけっこういいかげんで、私の記憶では一度もブントに誘われた

ことがない。四回生がブントを作ってるということは、分かってたんですが、「お前ブントに入れ」と言われたことが無い。ひょっとしたら八木はただの跳ね上がりやから、あんな奴をブントに入れたら問題やということで疎外されたのではないかな？私には内緒で、藤本君にはどうだということで、ブントに入ったら、今、告白をしてほしい。（ない！）あ、ないのね。本当に恐らく誰からも誘われなかったのではないかな。

そういう、いわば緩やかな組織だった訳ですね。藤本君が言ったように、共産党系、民学同が非常に強かったんで、そのまま対抗関係で党派性を設けようとして、結構いいかげんだった。

そういう時に、四回生の柳田さんが自治会に現れてですね、組織の引き締めにかかる訳です。

私たちがあまりにもいいかげんだから、「もうちょっと、ちゃんとせい」と言う事で、一種の党派性の権化のような感じで、我々の前に現れたのが柳田さんだったと思います。

もし大阪市大の社学同に、それだけの姿勢があったとすれば、それは柳田さんが支えていた。我々60年入学組が支えていたのではなくて、柳田さんではなかったかという風に思うんです。

そういう、筋金入りの党派性っていう感じは、柳田さんが大学から離れて度々会うことがあったんですが、ずっと変わらず持っていたイメージです。先程何方かが、人間性溢れる柳田さんと言いましたが、私はとってもそうは思えませんでした。（爆笑）もう、党派性の固まりのような人と、ずっと思ってた。学生の時なんですけど、柳田さんは何を思ったのか「俺は死ぬことは何も怖くない」と言ってみて、そうか、革命的戦士というのはこういうものなのかという風に思ったのですが、亡くなる直前にラストメッセージのような文章の中に「あと一年生きたい」という言葉があるんですが、それを読んだ時に、あー、柳田さんも人の子なんだなあという風に思いました。そういう人間的な片鱗を見せて旅立たれた訳ですが、柳田さんは、そういう意味ではやっぱり私たちの組織、党派性の要だったんだなあ、誰一人ブントに入らなかったんだけど、ブント的な党派性を持った集団に纏め上げて行ったのは、柳田さんだった。そういう意味で本当にたいした人だという風に思います。ご冥福をお祈り致します。（注）64年度全学自治会委員長 田宮高磨



★多賀哲也（62年大阪市大入学 社学同）

皆さんこんにちわ！来る途中の電車の中で、あるいはちょうど柳田さんからの思い出を送ってくれましたから、それを読みながら、色々考えました。来る途中で、やっぱり頭に浮かぶのは、自分自身がこの5月に肝臓ガンで入院して、又来月入院せないかんということも、あるんでしょうが柳田さんを偲ぶというよりも「散る桜 残る桜も 散る桜」と言うような、何かそんな思いをずっと感じながら、ここまで来ました。

柳田さんについて思い出すのは、私は二つしかありません。柳田さんから、いわゆるオルグをされたという記憶がほとんど無いんです。又、一緒に政治を議論したという記憶もありません。今覚えているのは、江南高校の同好会会館での、片桐さんとの結婚式に招かれて行った。そのあの思い出です。へー、なんと上品なところ

ろに生まれ育った方なんだろうと(笑)

それからもう一つは、私が大学の卒論がなかなか書けなくて、そんな時に確か、柳田さんのお家で初めてお世話になった事。その二つくらいしか記憶にありません。

今日の資料の中に書かれている、軍事委員長であるとか、いろんな闘争のことであるとか、ほとんど私にとっては記憶がない。

むしろ、ほんじゃあ、私にとっての柳田さんというのはどういうのかというと生年は1937年という風にありましたから、37年というと、私は1943年生まれですから、やっぱり6つも上なんですね。

だから、入学した時に初めて見た時に、やっぱり、右とか左とかじゃなくて、「大人やなあ」という感じがものすごくしました。やっぱり、本当に世慣れているというか、いい意味で世間を知っていらっしゃる方だなあということがありました。

私自身のことを言いますと、今はあまり運動とは、離れています。当時は、むしろ民学同の人たちと親しかったんじゃないかな。例えば民学同の今岡さんであるとか、吉田君であるとか、あるいは反原発運動の関係では、経済学部の方であるとか、そういう感じでした。

僕自身も今、一番感じるのは、グラムシの陣地戦という言葉、今真剣に僕らは考えないかんじゃないか？なんで60年安保のような政権危機ですら起こしてないのに、前段階蜂起であれ、言葉という形であれ、軍事という形にいったんか？

それに対して、なぜ素直に「いや、俺は右派だよ」ということには批判がもっとでなかったのか？そういうことを考えるには、グラムシの陣地戦は、敵ながらあっぱれな考え方なんやなあという風なことも最近思えてくる。



★児玉春海（江夏五郎 62年大阪市大入学  
共産同統一委員会）

ご紹介いただきました児玉です。

今日は来る途中に、私は、柳田さんとどういう風な関わりがあったのかなんてことを電車の中で考えて来ました。あの一、やっぱり世代がひとまわり、私は若いので、あまり直接の関わりっていうのは無いんですね。そんな中で、柳田さんと出会ったというか、お会いしたのは三回覚えているんです。

一回目は、私の入学。学校に入った時に、たまたま経済学部の自治会に行きましたら、藤本さんがおられて、それで奥の方から全くオッサンみたいな柳田さんが出て来てまして、二人ですね、いわゆるオルグというんですかねえ、そういう話をしました訳です。

僕はあまりそういう知識はないもんですから、聞いてい

たんですけれども、どういう話を藤本さんと柳田さんがしていたのかと言いますと、福本イズムと山川イズムというのが、あると。

日本の運動のなかには、その流れがあるという話をされたんです。私は、全然知識がありませんから、えらい難しいことを、知らなかったら太刀打ち出来んなあと思いつつ話を聞いてました。全く理解できませんでした。それが最初の柳田さんとの出会いで、あつたのではないかと思います。それから二つ目はですね、これは私の記憶の違いがあるかも知れませんが、第二ブントの初期の頃だったと思いますけれども、ベトナムの解放闘争に関する文章が載っていました。その文章書いたん誰やと言ったら柳田さんという風に聞きました。その文章というのは、ベトナムの解放闘争というのを、世界の階級闘争の中に位置付けて、民族解放闘争やということをはっきり述べた文章でした。その当時はベトナム戦争については、米国とソ連の代理戦争やという見解もありましたし、そういう意味では非常に階級闘争の視点に立っての文章として、私は読みました。その事は、今になって、ブントの国際主義とか、そういう事の大きな指標になっている文章と思います。それが二つ目です。

三つ目は60年代、先程の高弊さんもおっしゃいましたけど、堺において、柳田さんとか高弊さんが中心になって全逵の労働者とか地域の労働者とか、そういう人たちを集めて、堺反戦青年委員会を作りました。その時に柳田さんが中心になって、人を集めたりとか、堺の駅前に先程おっしゃった高弊さんのお父さんの不動産屋の事務所がありましたんで、そこにしょっちゅう集まって会議をして、地区で運動する度にメンバーが増えるという、非常に、未来が明るいといえますか、そういう風な時期をですね、過ごしました。

これが柳田さんとの出会いの三番目です。それから最後になりますけれども、僕はずっと地区の方で活動しておりましたもので、柳田さんと一緒に活動するっていう機会はありませんでしたけれども、1971年だったと思いますが、12.18ブントといえますか、全国党を作るという運動が、分派闘争によって挫折しました。その時に柳田さんから電話がかかって来て、ちょっと話をしようというこ

とで、梅田の喫茶店に呼び出されて、話をしました。

ところがですね、その話が、未だかつて本当に良く分からない話でして、柳田さんはどこのブントに属していると。来いと言うだけでオルグをするという事では無くて、そういうことは全くおっしゃらなかったんですね。

それで、この写真にも出てますけれど、にこやかな笑みを浮かべて、「まあ、最後の結論はよう考えて、いろいろ考えて判断しなさい」と。話はそれだけだったんですね。

私はそれが、未だもって、何のために、何を言いたかったのかわからない。そのうちに聞こう聞こうと思いながら、ついに聞くことができずに今日に至っております。私は、この柳田さんの、先程多くの方が言われた、微笑みというのは、本当に柳田さんの特徴なんですよね。

いつ会ってもこういう風なほんとは意味のわからない笑みを浮かべ、僕はそのことを、モナリザの笑みみたいに「アルカイツスマイル」と、そういう風に名付けて、今日まで思っている訳ですけど、今でもやっぱり柳田さんが結局おっしゃりたいことはなんだったのかと、今でも疑問が湧きます。以上です。



★鳥征一郎（60年大阪市大入学 社学同）

私は60年の入学です。

先程話した八木君と藤本君。次私に、来るんかなあとと思ったら61年の多名賀哲ちゃん（哲也）に行ったから、あ、私飛ばされたなあと（笑）。飛ばされても仕方ないんですよ。

と言うのは、柳田さんというのは、やはり志っていうかね、紆余曲折おそらくあったと思いますよ。しかし、一貫したものがある。それがあの人の値打ちやったと思います。

一方私はですね、高校時代から考えたら、基本的な考え方が六回くらい変わってる。

私飛ばされても仕方ない。それですね、いろいろ考えたら、一つはね、柳田さんがブント作ったのが59年の11

月で。私ら入学したのが60年の4月でした。たった5ヶ月しか違わないんですよ。

5ヶ月しか違わないのに、柳田さんブントの主みたいな顔してた。そんな時に思ったのは、あの人の印象に残っているのは笑顔ですよ。いつも顔が笑ってるんですよ。

私がこうして、柳田さんの訃報に接して、こういう会に出ている時に考えたのは、あの、最初の笑いを思い出した。あの笑いはどの笑いだと。人間主義の笑いなのか？軍事委員長の笑いなのか？人間主義というのがね、人によって出てきましたから。そういう風に思ったんです。

やはり、どっちかと言ったら、軍事委員長の笑いじゃなかったか？笑いながら冷徹に相手を差すという。

しかしながら、人間主義という言葉が出てきた以上は、もともと持っていた笑いであろうと。

そういう思いであります。もう一つ、飛ばされても仕方ない話をしますが、皆さんの話を聞いててね、思いました。マルクス主義とかレーニン主義とか多少は勉強しましたが、今読んでも全然わから

ない。と言うかね、読めない。

ただ、共通点ね、この間いろいろ勉強してきたんですけどね、共通点はあるんです。それは、あの孔子、孟子の話にいろいろあるんですけどね、真理は無限。身は有限。有限の我が身が無限を求めるこの不条理。こういう言葉があるんですけども、その点だけは、皆共通するんじゃないかと。皆さんが思っておられる革命というものも、そういう問題だと思います。失礼しました。



★新里良光（共産同神奈川県委員会「左派」）

私は、柳田さんについては、権力に対してはととても冷徹な男であったという風に思っています。

そういった意味では、さっき人間味という言葉があったけれども、そういう言い方はふさわしくないと思います。

本当に、権力に対しては徹頭徹尾冷徹で、特に日本国政府の手口、やり口に対しては最後まで冷徹な目で見続けて、物事をみんなにアピールしていったと思います。柳田さんの事は、私はそういった意味で、どちらかという党派的な人間だと思っています。

世間に対して、俺はどこでもいくから、立ち向かっていくからという党派的な人間だと。これが彼の一番の価値だと思っている。

そういう意味で、柳田さんの曖昧のない生き方に、

これからの自分の励みとして、学んでいきたいと思っています。立派だと思います。終わります。



★三浦俊一（66年関東学院大入学 共産同赤軍派）

佐藤秋雄さんと、二人だけ東京のブントでございます。関西の皆さんの話を伺っておりますと、つくづく関西ブントのいいかげんさに嫌気がさして参ります。

と申しますのも、関東学院大学時代マル戦派に居ましたもんですから、見事にフェイドアウト。

そして6か月後に戻ってみたらどんなんだろうという風に。ブントっていうのは、何がやりたかったのか、未だに分からない事なんです。さて、そんな話をするのではなくて、そうだ、柳田さんの話をしなきゃいけないんですね。

最後にします。それよりも今回、私はセールスマンですので、先程、榎原さんや八木さんがおっしゃっていた



# 追想にあらず

三浦俊一

1969年からの  
メッセージ

時代を超えて  
意志をつなぐ

『追想にあらず』という本を作るために1年やってまいりました。是非これをお読みになった上で、文句があるんだったらどんどんと文句を言ってください。

どちらにしても、文句をいい続けても、あと三年ほどで、文句は冥土の世界に入っていきやすい方が多いようにお見受けしますもんですから、よろしくお願いたします。

それと、柳田さんについて思いは一つです。一番私がしんどかった時に、声をかけてくれたのは柳田さんと西浦さんでした。この中身は申し上げません。と申しますのは、先程来5分と言われていたのが、みんな10分くらいになったもんですから、私は2分くらい返して3分で終わろうと思って

マイクを置かせていただきます。以上です。



## ★若林貫徹（若林盛亮子息）

皆さんこんにちわ。2002年9月10日に帰国した若林盛亮の長男の若林貫徹です。

9月10日で、帰国して17年目を迎えます。第二陣として帰国して、柳田さんには本当にいろいろとお世話になりました。

2002年帰国と言えば小泉首相が訪朝して、拉致問題だけが騒ぎになって色々バッシングも受け

たし、私共帰国者にとっては処分もあったし一番大変な時で、関西の大阪に来て、いろいろ生活基盤を築いていく上で、柳田さんにはすごいお世話になったんですけども、マスコミとか警察権力に家宅捜索されてきた訳やし、一番大変な時にやっぱり暖かく見守ってくれたのが柳田さんでした。

柳田さんを初めて知ったのは、平壤で中学生の頃で、「お元気ですか」という出版物というか機関紙ですね。日本に向けて送ってたんです。親がそういった政治活動してたんですけど、そういったことを手伝っていた訳ですけど、その住所録に「柳田健」という名前が載ってて、そこで赤木さんとか父に、柳田健さんてどういう方なんですかと聞くと、「赤軍派のリーダー格や。親分や」というのは鮮明に覚えています。

日本に帰って来て、柳田さんに対するイメージというか、そもそも親分やからけっこうすごい人なんやなと思ってたんですけど、さっきもどなたかがおっしゃってたんですけど、やっぱり人間感溢れる、私共にとっては裏方の校長先生みたいな感じがして、帰国してから、歓迎会を開いてくれたり、特に関西に住んでる私共仲間に対しては、休日に六甲山にとかドライブに連れていってくれたりとか、そういった優しい側面があり、いろいろとお世話になったのを覚えています。

六甲山ドライブの帰りに、私は行ってないんですけど、居眠り運転で怖い思いをしたという話もあ

ったり、そういったエピソードもあって、毎年、今はやってないんですけど、帰国の歓迎集会を開いてくださった。後は、親に対しては、いつでも変わらぬ支援を送って頂いたり。

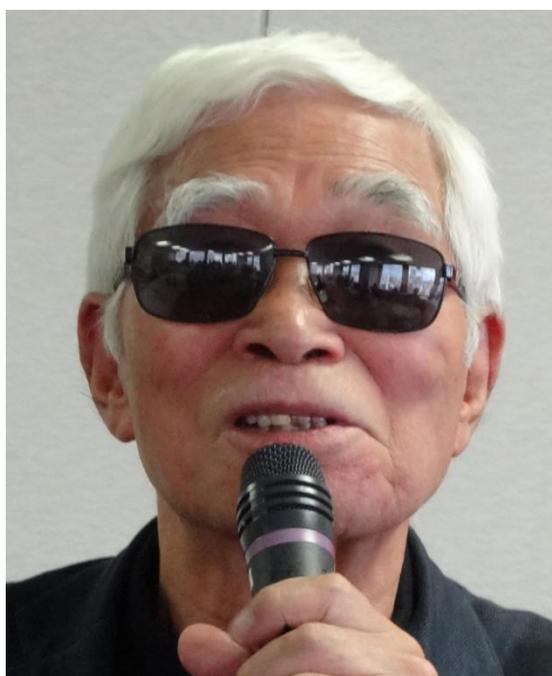
私は2年前に結婚しまして、そのときも祝いの場をわざわざ設けてくれて、梅田で何人かの方で祝っていただきました。すごく、私からすると、ここにいらっしゃる金子さんとかと、おしゃべりしている時は論理的な議論も交えて、すごい事おっしゃる方やなあと思ってたんですけど、その一面を見てみると、いつも裏方で、優しい眼差しで見守ってくれる校長先生みたいなってイメージが強かったですね。

まあ、そういった思いもあって、柳田さんには感謝の言葉しかないんですけども、生前、今年の2月にですね、病気が進行して神戸の赤十字病院に、2月に嫁と一緒に、金子さんも一緒に見舞いに行ったんです。

ちょうどバレンタインデーもあって、抹茶のチョコレートを持っていったのを覚えています。柳田さん、美味しい言うて食べてくれてたんですけども、背中痛みもすごくあって、擦ったりとかしたことを鮮明に覚えています。柳田さんが言うてたのは、ほんとに来てくれてありがとう、この日を待ってたよ、よく来てくれた、というその笑顔、今でも忘れられないんです。3月末には帰国に向けての学習会を開かなあかん、こういった事がまた柳田さんらしいなと感じます。又来ますと言ったきり、そのまま会えずにいたんですけど、今、20人の「よど号」グループの仲間たちの気持ちを代表して、今日この場をお借りして感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

柳田さん、本当にありがとうございました。「よど号」の今後も含めていろいろ課題が残っているんですけども、紆余曲折あるものの、いい方向に進むことを私は信じています。

これに向けて、どうぞご支援とご声援を、よろしく願いいたします。ありがとうございます。



★足立正生 (59年日本大入学 日本赤軍)

みんな5分と言われながら、15分や20分話してるので、僕は3分にします。

柳田さんと会ったのは、私は「海外出張」が長くて、「海外出張」が終わって帰ってからです。(どこが海外出張や!!□笑)あの一、それこそ柳田、西浦コンビで、反弹圧をもう一回全面的に展開したいという話になって、それと組むことになりました。でも、今日のスピーチを聞いたら分かるように、みんな反対派だったり、背中で旗振ったり、非常に真面目な人ばかりで、私みたいに、それで形にしようと思ったらラッキズムのようなレベルしかないですね。

これからいっぱいやりましょう!!以上。



★物江克男（66年滋賀大入学 共産同赤軍派）

物江です。

僕は赤軍派から日本赤軍へという流れの中で、活動して参りました。若干みんなと違うなあと感じているのは、ブントに関しては、色々問題はあったし、総括は必要だけれども、色々考えることは沢山あると思いますけれども、根本的に否定するという気はないですね。

そこは、どう継承して行くのかという立場からやって行きたいし、現在と地続きだということは最初に言っておきたい。その前提で、本当に柳田さんにはお世話になりました。

ブントのことは、僕が言わなくても、赤軍派の関係で、まずは「よど号」グループとの救援活動、それから、仲間のお葬式から含めて、いろんなことをやる時も、ほと

んどお世話になりました。

それから、本当は僕らがやらなければならない西川純の時も、丸岡修の時も、それから重信さんや佐伯などのことも、ほとんど柳田さんが僕らのケツを叩くという形で、現場は僕と、生きてる時は西田君がやって、ふたりで現場をやりながら、ほとんど柳田さんにケツを叩かれながら、何にやってんだと言われながらやってまいりました。

そういう意味で、本当に柳田さんには感謝してます。それで、最後の最後まで、亡くなる直前にお見舞いに行った時も、自分の死んだ後もちゃんとやってくれという形で言われましたし、その事は何回も念をおされました。

本当に僕らとしては感謝以外ないというか、本当にありがとうございました、ということです。

個人的には、いつも三人で、いろんな救援のことにたずさわり、いろんな思い出があるんですけども、一番本当に個人的に柳田さんとのことで心に残っているのは、ちょうど重信さんがパクられた時です。

僕はその当時仕事をしてた病院があって、それに関与してて、僕は事実上その経営者だった訳です。僕としては、片が付いたら責任を取るつもりでいたんですけども、その時に柳田さんに呼び出されて、とにかく辞めるなと言う事を、かなり、一晩かかってしつこく言われました。

僕ももう、片が付いたと思っていたんで、その話があったんで、定年までやって、けりをつけてやめた。

柳田さんは、そっちの側面でもある意味、器だったかなと思っています。そういう意味で、柳田さんみたいな人材がおられて、運動の中で、たくさんの先輩とつきあわせて頂きながら、今日までやってきている訳ですけども、やっぱり柳田さんはいろんな意味で器だったし、僕らの来た道を作ってもらったという意味で、学ばねばと、これからは感謝していかねばと思っています。

今日は、心からありがとうございましたと言うつもりできました。以上です。



★加藤勝美(60年大阪市大経済学部入学 62年全学自治会文化部長 63年大学祭実行委員会委員長 社学同)

60年入学の加藤です。

今日は、話をする予定はなかったんですけども、柳田さんについてですね、同期の八木君が言ったように、党派性の権化という感じがあって、在学中は彼とずっと離れてたんです。

大阪市大で柳田さんと片桐えつこさん、えつこさん、えっちゃんと呼んでましたけれども、あの二人のカップルといつも一緒だったんですね。

あのね、ふたりの結婚式の司会を、僕がしたんです。柳田さんはえっちゃんとか、片桐さんとかいって話していて、一番最初に、結婚してしばらくしてから、僕に柳田さんが、「サルトルはヴォーヴォワールを抱かん」と言っていて、僕は、そうなのかなと。

つまり、サルトルとヴォーヴォワールは、結婚していても、お互い自立した人間であるということだと思っただけですけども、だから、そういう意味では、えっちゃんというのは、多分、それほどええ嫁はんではなかったと。ただ、えっちゃんはですね、大阪市大に入ってきた時にですね、非常に我々にとって畏怖に値する存在だったんですね。

つまり、お茶の水学院大学を出て、樺美智子みちこさんの同級生。

しかも大阪市大にきて大学院行って、経済哲学を受講するという、非常に僕たちの間では、片桐えつこさんは、畏怖な面で見られていました。

大阪市大の60年以降に入学した連中の中で、クラス討論でえっちゃんがきて、彼女にひかれてサークルに入った人間が何人かいるはずですよ。

そういう意味で、えっちゃんと柳田さんとの関係は、次第に大きなものになっていったと思います。片桐さんは音楽が好きで、結婚する前に柳田さんと一緒に音楽会に行ったら、柳田さんはあんまりクラシックは好きじゃなかったみたいで、途中で柳田さんは眠ってしまったという風なことを、柳田さん自身がしゃべってました。

それ聞いて、柳田さんは、よく自分のプライベートなことを、話していたなあという風に思います。あともう一つ。今まで大阪市大以外の人たちの話を聞いていて、非常に印象深く、面白いなあと思って聞きました。

それに比べると、大阪市大の連中のスピーチは、全然おもしろくない。(笑)これは何か理由があるんじゃないかなと思いますけれども、これはやっぱり関西ブントというんか、それも関係あるのかもしれない。

もし、柳田さんの追悼集を作るとすると、まあ、大阪市大の連中は、だいたい省いてですね、他の人たちの話の方を載せた方が面白いものになるんじゃないかと思います。

そういう意味で、今日、柳田さんを偲ぶ会においては、大阪市大以外の方々に、柳田さんに代わって、お礼申し上げたいと思います。どうもありがとうございます。



★森本忠紀 (64年京大入学 社学同)

ありがとうございます。僕が大学に入った頃はですね、ここに集まっている仲間と、音楽で革命ができるか？歌で革命ができるか？こういうのが主流でしたね。まあ、ちょっと音楽好きな連中、隠れてギター弾いてた。そういう時代でしたね。

何で革命やるんだというと、やっぱり暴力革命になる。みんなも真面目な顔して、まともな顔してやっつけたね。ところが、塩見孝也さんが奥から出て来て言うには、「俺は平和主義者だからよう」言うてはりましたね。それから、重信メイさんはやっぱり、お母さんのことは支持するけど、お母さんらの時代で間違った。運動のやり方は間違ってたと言ってますね。それはやっぱり暴力の問題だと思います。

今ここに来ておられる方、3年ほど前に同志社のイベントがあった時に、「革命というのは暴力です」と、最近では珍しく聞きました。

今、平和主義を唱える方が、かつての暴力革命とどういう人格的に違うのか？もし良ければ、二次会で話していただけたらありがたいと思います。

「沖縄を返せ！」という唄を、沖縄復帰運動の時に流行った唄ですね。日本全国に広がりました。その後、沖縄を返すのはおかしいと、間違っると。「沖縄へ、返せ」ではないかと。僕もそれは、当然「沖縄へ、返せ」ですよ。貸しっぱなしになってますが、「沖縄へ返せ」になります。

唄は「沖縄を返せ」というのと同じですので、唄って頂きたい。(民族の怒りに燃える島を県民に変えただろ!!)最近皆そうです。

(それはおかしいで琉球民族の島やから。おかしいですよ!!□)ハイハイ。



(演奏始まる)

固き土を破りて 県民の怒りに燃ゆる島/沖縄よ！/我らと我らの祖先が 血と汗を持って/守り育てた 沖縄よ！/我らは叫ぶ 沖縄よ！/我らのものだ沖縄は/沖縄を返せ！/沖縄を返せ！/沖縄を返せ！/沖縄を返せ！/(間違えた)/沖縄へ返せ！/沖縄へ返せ！  
ありがとうございました。